

していた大友宗麟は、使者を国東に派遣し、田原宗龜の意向を質した。

田原宗龜の要求は、父親述、兄親董、宗龜と三代五〇年にわたって、大友家の勘気を被り、大内家で亡命生活を送っている間に、国東・安岐両郷を中心とする旧領を奪われ、分家の武蔵田原家や大友家臣団に与えられていたのを返還してほしいというものであった。

大友宗麟は二つの条件をつけて、宗龜の要求を入れた。一つは、宗龜の養子を廢嫡して、宗麟の子で林家を継いでいる新九郎親家を養嗣子として迎えること、もう一つは、大友家に対する忠誠の証しとして、一てだてを企てるというものであった。

田原宗龜は、この条件を飲み、杉重良に、永祿年間の旧領京都・仲津（田川カ）二郡を与えると誘い、両郡奪回のため、蓑島へ軍勢を送ったものと考えられる。しかし、このてだては失敗し、田原宗龜も、この年九月十六日病死した。

四 高橋元種の台頭

元種、長野助守
らを勢力下に

天正七年（一五七九）四月、小倉城の高橋鑑種入道宗仙が病死した。そのあとを秋月種実の子息（種実の弟という説もあるが、『黒田家譜』の説をとる）九郎元種が継ぎ、田川郡に侵

入して、岩石城・香春岳城に拠った秋月種実と連携して、京都・仲津二郡を与えられていた長野三河守助守を従え、築城郡の城井鎮房をも圧迫して、その勢力下に入れていく。

天正七年三月十九日、養島合戦の後、田原宗亀からの書状に対して、秋月種実は「重ねて承りまじく候、恐れながら、御家の儀、追て、御後悔なきよう御才覚、この時に候」（『種田文書』）と、宗亀の一連の行動に不快の意を示している。

『仲間文書』五月十日付に「城井民部少輔がこと、順路の覚悟深重の故、秋月、高橋巳下の悪党申し組み、鎮房に至り懸け催さるべきの由候」と城井鎮房が秋月・高橋勢に攻め寄せられようとしているのは、天正七年のことであろうか。

天正七年九月二十八日、長野助守が毛利氏へ送った覚書によると、このころ、城井鎮房が大友氏から離反し、仲津郡を長野助守へ返還、香春一の岳・二の岳が大友氏に占領されたこと、助守の子息少輔五郎を人質として、毛利方である門司城へ差し出したこと、長野氏の旧領京都郡と仲津郡を毛利輝元が安堵してほしいと申し入れている。

『大友文書録』によると、このころ、豊後から志賀道輝・朽網宗歴らが豊前中津（仲津郡カ）に出陣し、秋月種実の討伐を議して、田川に陣を移し、長野氏を攻めて宝森城（所在不明）を抜き、香春岳を攻めた。秋月種実は古処山から豊前仙津に出陣し、豊後勢が敗れ、中津城（犀川神楽城カ）にもつたという。右の長野助守の覚書と関連するものであろうか。確実な史料に乏しく、真偽のほどは今後の研究に待ちたい。

田原親貫が挙兵

天正八年（一五八〇）正月、田原宗亀の養子親貫が安岐城で挙兵した。親貫は秋月種実の弟長野種信の子で、宗亀に男子が無かったので、婿として迎えられていたが、大友宗麟は、自分の子林新九郎親家を養嗣子とする条件で、田原本家の旧領国東・安岐両郷そのほかを返還した。



秋月種実の花押

これを知った田原親貫は、後に豊前との国境に近い鞍懸城に移り、秋月種実や毛利氏の支援を仰いで、豊後の一郭を確保しようとした。

天正八年二月、筑前立花城督として、宝満岳城の高橋紹運とともに、筑前方面で叛服を繰り返す秋月・筑紫・宗像・麻生・杉連絡・原田らの国人の討伐に縦横の活躍をしていた戸次鑑連入道道雪は、豊後南郡の重臣一三人にあてて、主家のことを思う熱烈な檄文げいぶんを書き送り、豊銃の情勢に対する処置を要望した。その中で、「①秋月辺から、大友宗麟の『無道の条數十ヶ条』余を書き立て、近国へ触れ回っていること。②豊後では重臣をはじめとして男女ともに天然宗になり、寺社を破却し、仏神を河に投げ入れたり、薪まきにしたり、寺社領を人給に宛行つて仏神をないがしろにしている。『日本は神国と申す』から、順儀天道に背かないようにすべきである。③近ごろ、秋月と竜造寺が一味し、親貫加勢と号して二、三か国の者を集め、日



田原親貫の花押

田・玖珠辺へてだてをなそうとしている。親貫方から、しばしば津崎善兵衛入道が、秋月から上野四郎兵衛・江利内蔵助が往返していた意味が今やつと分かった」と田原親貫の動きを伝え、大友宗麟の洗札による豊後国内の分裂を警告した。

天正八年三月二十八日、西郡衆（高橋・長野勢）が、中津河表へ現れ、下毛郡の蠣瀬・成恒氏らの大友方が撃退した（『成恒文書』）。これは、田原親貫加勢と称して、豊前東部の攪乱を策したものであった。

四月、豊後の有力武将の一人田北大和入道紹鉄（鑑富）が熊牟札城に兵を挙げ、



戸次道雪の花押

秋月方と合流しようとして玖珠郡から日田郡へ移動しているとき、日田郡松原村で財津左京亮らに討ち果たされた。

宇佐宮の離反

この豊後の変乱に乗じて、宇佐郡でも、宇佐社官衆である宮成右衛門尉公基、益永民部少輔統世、時枝備後守鎮継・橋津佐渡入道英度・辛嶋・上田らが挙兵し、「郡内動乱」した。宇佐宮は、大友氏の支配下に入ってから、社奉行奈多鑑基・鎮基と二代にわたって対立し、毛利氏や秋月氏に接近していった。奈多鑑基は娘を宗麟の正室とし、子息親賢（紹忍）を武威田原家へ養子として送り込み、田原本家をしのぐ権勢をふるい、宇佐宮社官・供僧の衆議による自治を認めず、豊後の「憲法」を押し付け、これに違背したときは、その所領を没収し、彼の家臣に預けたので、社官衆の反発を招き、大友氏になじまなかった。

天正八年八月、田原親貫は毛利氏のもとへ如法寺親武を送り、海上からの支援を取り付け、安岐城沖へ毛利水軍一〇艘が姿をみせたが、豊後水軍に阻まれて、港に接近することができなかった。

野仲鎮兼の独立

このころ、下毛郡の野仲鎮兼は秋月方の調略にこたえて、賀来安芸守統直、福島佐渡守の切寄を襲い、下毛郡の大友方は両城に籠城して防戦に追われる日が続いた。この動きは宇佐郡の安心院・元重・拜田・矢部・四日市、豊後高田の千部口・大利口にも及び、大友氏はこれらの切寄へ奉行を送り込んで防戦に努めた。

天正八年九月八日には、「城井・長野以下の悪党、赤尾三河入道



野仲鎮兼の花押

宅所え取り懸げ、村中放火せしめ、切寄に詰め寄り候といえども、堅固の格護をもつて、敵あまた仕付け、分捕り高名す。…野仲がこと、心元なきのよう申し散じ候や」（『佐田文書』、原文は漢文と、豊前東部の混乱は続いた。豊後の大軍による鞍懸城攻撃が半年以上も続き、豊前への出陣が不可能である隙をついての動きであった。

同十月、安岐城・鞍懸城が相次いで陥落し、田原親貫は逃れて、豊前善光寺辺に隠れていたが、後に時枝氏に滅ぼされたという。

その数日前の十月三日、大友勢は中豊前へ一てだてを打ち、「敵領数多打ち崩した」（『問注所文書』）と、宗麟が問注所統景へ報じている。

五 宇佐宮・彦山回祿

彦山焼失 天正九年（一五八一）には、兵火によって、開闢かいびやく以来初めて、宇佐宮と彦山が焼亡した。大友

「国家」崩壊寸前の悪あがきでもあった。

彦山は、天正七年正月、座主舜有が秋月方に降り、政所坊連長と伊良原因幡守を人質として差し出し、秋月種実の三男竹千代を養子とする約束を交わした。

天正九年十月八日、日田・玖珠郡衆が彦山を包囲し、別府口・落合口・玉屋口から攻め登り、大講堂に陣をとり、下宮座主舜有を西谷の上かみ来山くへ追い上げ、十一月三日、一山ことごとく回祿（焼失）した（第8回